

水位観測45年間の思い出
天竜川と生きて

水位観測45年間の思い出

天竜川と生きて



笑顔、きらきら、天竜川。

天竜川上流河川事務所

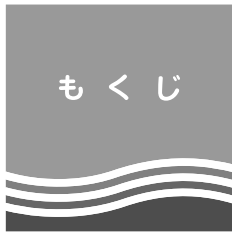
〒399-4114 長野県駒ヶ根市上穂南7-10
Tel:0265-81-6415 Fax:81-6421(調査課)
<http://www.cbr.mlit.go.jp/tenjyo/>

下平長治

水位観測45年間の思い出

天竜川と生きて

下平長治



まえがき 4
 天竜川と我が人生
 水位観測の基礎知識

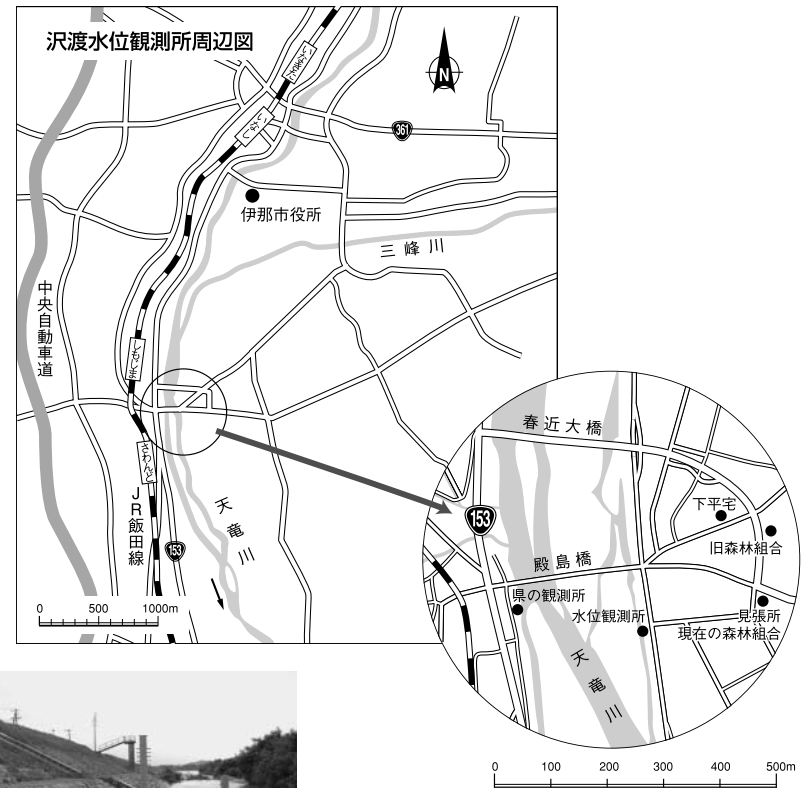
第一章 水位観測事始め 8
 天竜川洪水録
 観測人生の始まり

第二章 観測の今昔 10
 観測の歴史と思い出
 コラム：水位観測の今昔
 懐かしの観測スタイル
 電話秘話

第三章 三六災害の記憶 14
 三六災害概要
 沢渡の三六災害と観測
 哀しい出来事
 三六災害と治水事業

第四章 追想 20
 観測員研修会のこと
 豊かなり天竜川
 叙勲に寄せて

天竜川沢渡水位観測所



観測所全景(上流より下流を望む)



量水標近景



上空から見た観測所付近(←)が観測所



天竜川と我が人生

私は天竜川のほとり、伊那市東春近で生まれ75年生きてきました。川で遊んで育ち、水位観測員として川に関わり、天竜川の姿を、間近で、またある時はそのまっただ中で眺めて、川とともに長い歳月を過ごしてきました。

伊那谷に大いなる恵みをもたらすこの川は、一方で「あばれ天竜」の異名をとり、たびたびそれを誇示するかのよう大暴れして、出水や土砂災害を繰り返してもきました。梅雨や夏の激しい夕立、秋の台風シーズンなどの水位観測は、*警戒水位を上回ることもしばしばで緊張が続ききました。しかし、常に川を見ていれば、どこがどんな状態か、川のこと手が取るようにわかるようにもなりました。増水すれば、魚が流されまいと岸に寄ってくるので、面白いように鮎やカジカが捕れ、思いがけない大漁の役得に、つい得意になったりしたこともありました。

毎日単調に同じことの繰り返しに見えて、同じ一日はないのです。ふり返ればいろいろなことがありましたが、つらい出来事さえも今は懐かしく思い出されます。

天竜川と生きてきたわが人生の伴走者である妻は、水位の計測も、私の助手どころか、実質の観測員はこの人ではなからうかといえるほどに根気よく続けてくれた第一の功労者です。駆け出しの昭和32年などは、私が急性腎炎で入院し、仕事も休んでおりましたので、観測も長い間任せっきりでしたし、健康になったらなったで、夕方から出かける用事や一杯の機会も増えたりして、結局、朝は私、夕方は家内といった暗黙の

*右図参照

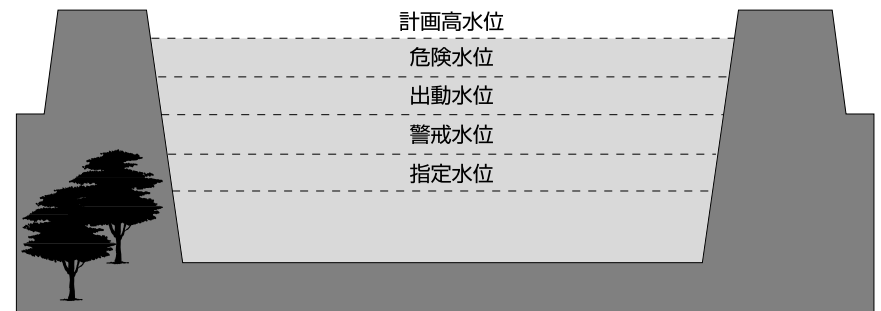
役割分担を作ってしまいました。私など、この協力者がいてくれたから、どうにか務まったのだと言えます。

観測員を平成9年に引退して8年、今では川とのつきあいも、気楽なものに変わりました。ここ最近の気がかりといえば、ざざ虫の生育ぐらいでしょうか。去年は、秋の台風で、いい時季にみんなやられてしまったので、今年はたくさん獲ればいいが、といった具合です。

幾多の災害を教訓に、だんだんと防災も整備され、今こうして安心して暮らせるようになったこと、たくさんの恵みを享受できることに感謝し、これからも、天竜川の流れを見守って、ぼつらぼつら家内と一緒に歩いてゆきたいと思っています。

読んでくださる方にとっては、退屈な昔話かもしれませんが、この場をお借りし、半世紀近くの観測人生をふり返って、私の水位観測を締めくくりたいと思います。

洪水時の水位



計画高水位	河川整備の目標としている水位 (この水位の水を安全に流せるよう整備がすすめられています)
危険水位	具体的な箇所で氾濫の恐れがある水位 (河川管理者と水防団などで毎年堤防巡視を行い危険な箇所を確認しています)
出動水位	水防団が出動し、パトロールなど実施
警戒水位	水防団が出動の準備、今後の水位などの洪水予報を開始し発表
指定水位	各水防機関(国・県・市町村など)が水防体制に入る水位

ここでは、筆者である下平さんが長年行ってきた水位観測の方法について説明します。

◆河川の水位観測

沢渡水位観測所

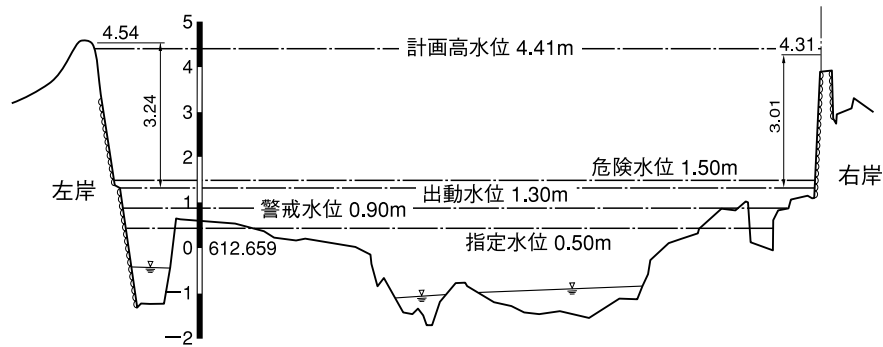
下平さんが水位観測を行っていた沢渡水位観測所は、伊那市東春近渡場の殿島橋下流にあり昭和29年から観測を始めています（p3位置図参照）。

下平さんが行っていた水位観測

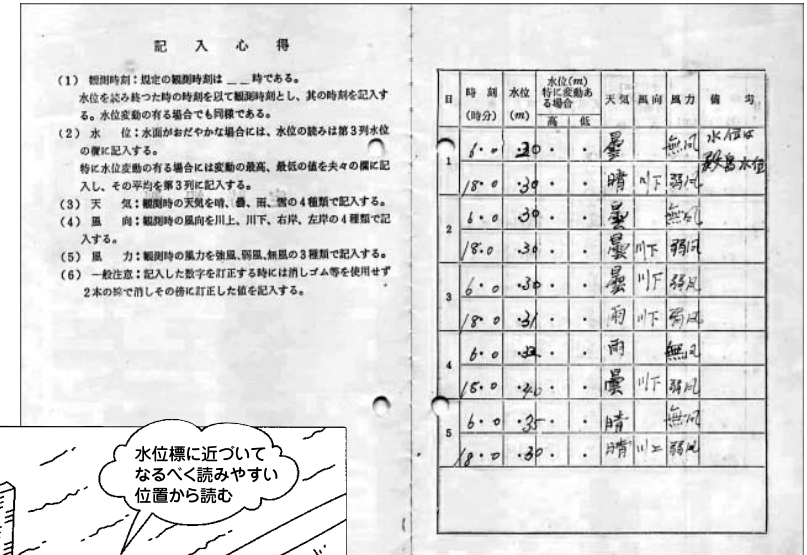
普段、川の水位が低い時は、朝・夕6時の1日2回観測を行います。雨で川の水位があがった時は、昼夜を問わず毎正時観測を行うこととなります。

沢渡水位観測所 諸元

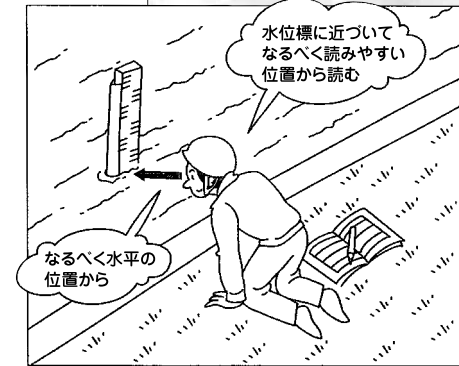
観測開始：昭和29年7月1日
川幅：約200m
普段の水位：-0.4m
指定水位：0.5m
警戒水位：0.9m
出動水位：1.3m
危険水位：1.5m
計画高水位：4.41m
※各水位の定義は、p5参照



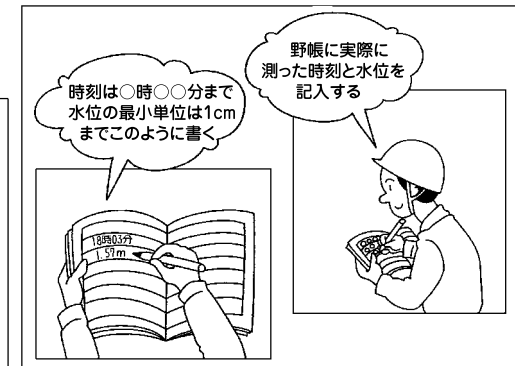
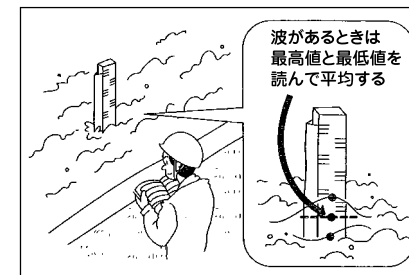
下平さんが記録した「水位観測野帳」の一部



水位観測野帳（下平さんが実際に使用していた野帳）



普段は朝夕6時
出水時は毎正時に観測



現在の水位観測は、センサーによる自動観測で、リアルタイムにパソコンや携帯電話で川の水位を知ることができます。

- ・パソコン <http://www.river.go.jp/>
- ・i-mode <http://i.river.go.jp>

読者の皆様に、本書の内容をより理解していただくために、水位観測の方法について記述しました。

（文責 天竜川上流河川事務所）

第一章 水位観測事始め

天竜川洪水録

天竜の歴史は、まさに氾濫と出水の繰り返し。天竜川の洪水の記録は西暦701年から残されているのだそうです。江戸時代中期の1715年（正徳5年）には、「未満水（ひつじまんすい）」という大きな水害があったそうで、大量の土砂を含んだ天竜川やその支流は、各所で氾濫し狭窄部の上流を湖と化したことから「満水」と呼ばれたと伝えられています。

殿島橋が落ちたのは、たしか昭和12年だったろうと思います。日華事変が始まり、戦争色が日々濃さを増していった年、当時流行した千社まいるの光景と相まって、その水害は、私の記憶に最初に登場する天竜川の驚異としてとどまっています。まだ幼い子供でしたが、橋が流されたと聞いた衝撃は大きく、震え上がる思いがしました。その当時は、まさか毎日、天竜川の水位と首っ引きになる将来が待っていようとは微塵も考えていませんでしたが、それでもこの川と水に、無関心でいられない環境が、私の一生に大きな影響を及ぼしたであろうことは容易に想像がつきます。

観測人生のはじまり

とにかく昔は、頻繁に自宅の庭に水がついたものです。昭和28、34、36、57、58年はいずれも記録に残る大洪水の年でしたし、近いところでは、平成11年にもかなりの出水がありました。昭和28年は、大凶作と我が家の床下浸水の出水が重なった年で、なぜそれが記憶にあるかといえば、私と妻が結婚したのが、ちょうどその年だったからなのですが、当時天

竜川上流域では建設省（現国土交通省）による堤防工事が進められており、殿島橋の脇には、「見張り所」といった現場事務所があって、所長さんと技術員さんが1人と、事務員さんが2人詰めていらっしやっただと思います。私はこの工事現場に務めておりました。

当初、ここ沢渡での天竜川水位観測は、県の土木課が先にやっていたように記憶していますが、続いて、建設省の調査が、昭和30年頃に右岸（川上を背にして右側）で始まりました。堤防工事に携わっていたうえに、家が近かったこと…、おそらくはそんな理由から、何らかのお話をいただいて、水位観測をお引き受けするようになったのだと思います。そして昭和34年に父親が他界するまでは、父の名前で登録して観測していましたので、実際に下平長治と記名する調査記録を書いたのは、昭和33年からではなかったかと思います。それももう、半世紀近くも前のこととなりますが、非常勤公務員という、肩書きをいただいて、朝6時と夕方6時、普段はこの1日2回、定期観測をし、ひとたび警戒水位を超えれば、1時間に1度の24時間体制で計測をし報告をする、そんな日課がこうして始まりました。

私は堤防工事の人夫でありながら、このようなお役をいただいたことで、当時の建設省の事務所の職員さん方にととてもよくしていただき、同窓会などの仲間にも加えていただいたおかげで、楽しい時間をたくさん過ごさせてもらいました。おかげさまでOBの方たちとは未だに親交があります。悠長な時代でしたから、見張り所でも、時には仕事のあとみんな一杯やったりしたものです。その頃飲んだお酒は、ぶどう酒に質のよくない焼酎を混ぜたかなり劣悪なものだったと思いますが、それでも、それしかないのですから、建設省のお偉い方も誰も彼も、それを飲んでいました。今ならきっと、まずくて飲めない代物ですが、私にとっては青春が薫るかのような幻の酒。なんとも懐かしい限りです。

第二章
観測の今昔

観測の歴史と想い出

河川の水位観測は、治水・利水計画の策定や、出水時の危機管理及び河川環境の把握のための基礎的調査で、現在では計測方法も多岐に及び、無人でも計測結果が瞬時に伝送されるシステムが構築されていますが、私が長年行ってきた観測の方法は、川の中に量水標と呼ばれる“ものさし”を立てて、水位を直接目測する方法です。伊那谷には、水神さまが祀られた河畔に、石造りで寸単位のついた歴史のある量水標が残っていたりするので（P11 参照）、こうした水位観測がずいぶん昔から行われ、出水に備えていたことがうかがえます。

沢渡の観測点は、ちょうど三峰川が天竜川に合流し、川幅が急に広がっているところにあり、この辺りは、昔から洪水の度に川筋が変わり、川筋を挟んだ地区の境界紛争が絶えなかったようです。その名残りをとどめてか、今も大きな出水のたびに川筋が川の中をあちらこちら蛇行するものだから、とても水位が計りにくく、右岸から左岸に観測場所を移したり、ポイントをずらしたりして、また、実際の川筋から観測点が外れてしまっているようなときは、観測点とは別に、川筋の水のある場所も加えて、2ヶ所の水位を報告したこともありました。

当時は、堤防から川に降りるのに、まだ階段などなく、石垣を下りていたので、何度か滑ったり危ない思いをしたこともありました。川筋や水位の加減で河原に降りられないときは、県のものさしの水位を見て報告したこともありました。

◆水位観測の今昔

河川の水位観測は、治水・利水計画の策定や、出水時の危機管理及び河川環境の把握という目的で行われる非常に重要な基礎的調査です。

水位観測の方法は、川の中に“ものさし”を立てて、水位を直接計る方法が古くから行われていました。この“ものさし”は、量水標と呼ばれています。

写真-1は、天竜川上流部に現存する量水標の中では最も古いものです。この量水標は、高森町と豊丘村とを結ぶ万年橋の数十m下流の右岸にあります。

この量水標が設置された正確な時期は不明ですが、「尺」単位でありまた表記がアラビア数字であることから、尺貫法が廃止される昭和33年以前で、アラビア数字が使われるようになった明治以降のものだと推察されます。付近には水神様も奉ってあり歴史観あふれる場所となっています（写真-2）。

現在の水位観測の方法は、従来どおりの量水標（写真-3）による場合と、フロート式のもの（図-1）、水圧を計測し水位に換算するもの、超音波を利用したものなど計測方法は多岐に及んでいます。

また、計測された水位はインターネットなど各種方法によりリアルタイムの水位状況を知ることが出来ます。日頃から河川水位に関心を持つことが、出水時の有効な防災につながります。以下のいろいろな方法で水位情報を入手してみたいかが？



写真-1/石造り尺単位の量水標
6~14段が確認できる。1段の高さは1尺(30.3cm)になっている。1段の左に1寸(3.03cm)単位の小段も付けられ寸単位での観測ができるようになっている。歴史的価値のある量水標と言える。



写真-3/現在の量水標



写真-2/水神 写真奥に石造りの量水標がある

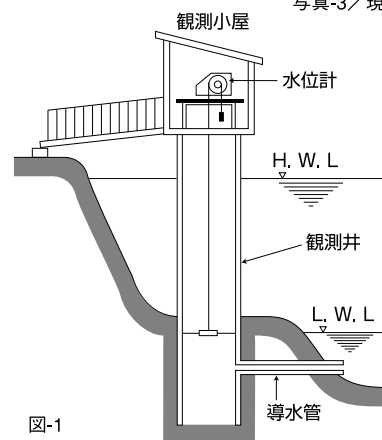


図-1

フロート式水位観測施設/川の水を導水管にて観測井に導き、観測井内の水位をそこに浮かべたフロートに計測する施設。

水位の入手方法

- ・インターネット/天竜川上流河川事務所のホームページ /国土交通省の防災情報 <http://www.river.go.jp/>
- ・iモード/国土交通省の防災情報 <http://i.river.go.jp/>
- ・電話/電話応答装置 0265-83-0812

(文責 天竜川上流河川事務所)

懐かしの観測スタイル

昭和30年代、雨の日特に消防団の防災出動と重なる時には、消防の法被の上に蓑（みの：写真参照）と菅笠。毎時観測になると、観測をして、電話を借りに行き、報告をして、家に帰って、また、30分もしないうちに次の時間が巡って来てしまう。もう蓑なんか重くぐっしょり湿ってしまい、ほとんど役に立たなくて、身体は芯から冷えてびっしょりになり、寒くてしょうがないから焼酎をあおって、着替えては濡れ、濡れては着替えでせわしく、しまいには着るものもなくなる有様でした。大雨が降れば自転車に乗ることもできず、水かさが増せば、轟々と濁流が猛り狂い、殿島橋を渡るのも、とても恐かったのを覚えています。

また当時は、天気予報の情報も少なく、山の雲を見たり、風を気にしたりして、天候の変化にはとくに注意を払い、常に川を注視するという生活をしていました。

「北風が吹けば三峰川に水が出る。南風が吹けば天竜が荒れる。」伊那の消防でも、よくそんな風について警戒したものです。



蓑

電話秘話

不便という意味では、天気予報どころか、まだ家に固定電話もありませんでしたから、水位を、天竜川上流河川事務所に報告するのも難儀でした。最初は、伊那森林組合の事務所へ寄り、よく電話を拝借しました。森林組合の当直が、お酒好きな方ならば、むこうも私がもう来る頃だと思って酒の用意をして待っていて、電話で報告が済めば、さてお役ご免とばかり、しばしの酒盛りになったことも一度や二度ではなかったはず。そんなわけで、私の中では森林組合で電話をお借りした時期が結構長かったように記憶しているのですが、家内はだいたいいつも見張り所で電話をお借りしていたような気がする」と申しまして、まあ70過ぎの

隠居の申すことだからと大目に見ていただきたいのですが、いずれにせよ、そんなふうで、電話をするのも大変な時代でした。携帯電話が当たり前な今の世の中、若い人には、想像ができないかもしれません。

そうこうしているうち、昭和45年だったと記憶していますが、家に電話を設置していただきました。この近所一帯で一番最初の電話だったでしょう。自宅から、報告の電話がかけられるようになって、それはうれしかったものです。個人での利用分はノートに付けておいて、精算してもらっておったと思います。しばらく後に、広く一般に電話が普及すると、*伊那の出張所から権利を譲っていただき、その番号は晴れて我が家の電話となり、今に至っております。

*天竜川上流河川事務所の出先機関



現在の森林組合事務所

第三章 三六災害の記憶

三六災害概要

今も語り継がれる天竜川の大洪水に、三六（サブロク）災害があります。昭和36年に伊那谷を襲った空前絶後の水害は、その年の年号からこう呼ばれています。

今から44年前の昭和36年6月の梅雨前線は、日本列島の真上に陣取り一週間にわたって停滞していました。雨は、23日から断続的に降り続き、台風6号の接近にともなって激しさを増し、27日には、ついに集中豪雨となって襲いかかりました。

日本各地で洪水や災害を引き起こしたこの大雨は、長野県南部の伊那谷に、とりわけ甚大な被害をもたらしました。降り始めから総雨量は500ミリを超え、濁流はあちこちで山肌を削って本流になだれ込み、一気に水嵩を増した天竜川は巨石をも転がしながらすさまじい音を立てて流れ下りました。崩れた土砂は狭い谷をせき止め、押し寄せる水圧に耐え切れなくなると土石流となってさらに本流に注いでいきました。中小の河川ばかりか、下伊那では天竜川本流でも堤防があちこちで決壊し、人家も田畑もたくさんの命も、水の勢いと土砂に押し潰されていきました。

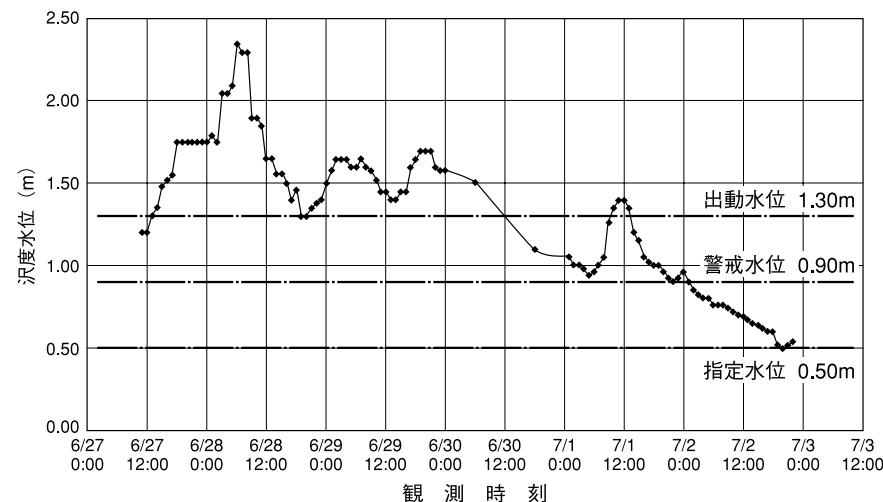
沢渡の三六災害と観測

ここ沢渡でも、抜き差しならない状況が続き、警戒はピークに達していました。その頃私は農協に勤めており、倉庫係をしていましたが、倉庫の大屋根の雨はトヨ（樋）に入りきらず、バケツをひっくり返したような有様で、こりゃえらいことになると思い、家に戻りました。

家の付近までくると、天竜川は持ちこたえていたものの、川へはけきれない水で、家の周りは浸水していました。あわてて飼っていた豚を避難させたのを覚えています。消防では土のうを堤防に積んで、警戒しつつ、場所によっては被害を食い止めるという二重の大仕事となりました。天竜川の水位は27日に1メートルを突破、28日未明からは2メートルを超え、毎時観測は、7月2日までの連続5日間に渡りました。交代といっても妻と二人では寝る間もなく、途中からはふらふらになり、さすがに体がもたないと観念して、近所の人にも応援を頼み、快諾を得て手助けしていただいたおかげで、なんとか水が引くまで続けることができました。

当時一帯の電話ケーブルは、殿島橋の欄干上に設置されていたのですが、早々に橋の上も冠水したので、森林組合も見張り所も電話は不通となり、いよいよ困って、雨と洪水の道を水しぶきを上げてバイクを走らせ、伊那市駅に電話を掛けに行ったりしていました。するとまもなく、建設省から無線が配給され、それで報告をするようにいわれてほっとしたのもつかの間、如何せんその無線は調子の悪い代物で、聞こえたり聞こえなかったり…、苛々するほどにとっても気をもみました。

S36年6月 洪水時の沢渡推移観測所の水位変化



哀しい出来事

話が前後しますが、27日の夜だったかと思いますが、伊那の「万里」という飲み屋に立ち寄ると、建設省小渋川出張所の庶務主任、井口さんと偶然一緒になりました。「よく降るね。仕事で伊那に来たが、電車が止まってしまった。それでも小渋川が心配だから、これからタクシーで戻るよ」と井口さんは話されて、帰って行かれました。

水位が下がりはじめた29日、無線を聞いていると、小渋川の上流で大西山が崩壊して、大鹿村が土砂に飲みこまれたとっているではありませんか。よく聞こえない無線ではありましたが、死者や行方不明者が多数出ているようで、大災害に違いないことだけはわかりました。29日午前9時10分頃、大音響とともに約280万 m^3 の土砂が集落を襲ったのだそうです。井口さんはどうしたんだろうかと思い、どこからか湧いてくる胸騒ぎを抑え、安否を気遣っておりましたが、出張所にも土砂が押し寄せ、井口さんも事務員さんも殉職されたと伺いました。

もちろん、自分自身も未曾有の災害の渦中で、観測という重責を負っ



大西山(大鹿村)の土砂崩落(S36.6.29)



飯田市松尾地区破堤(S36.6.)



危険水位を超え殿島橋にせまる濁流(S36.6.23)



土砂に埋まった沢渡の民家(伊那市沢渡)



埋まった土砂の災害復旧作業(伊那市沢渡)

ていたので無我夢中でしたが、その間にも過日の元気な井口さんの姿が何度も頭をよぎり、信じられない思いと信じたくない気持ちの入り交じる中、気力だけを頼りに毎時観測に出かけていました。雨は止んでも天竜川のすさまじい流れと水量は、心の動揺と同じくなかなか収まらず、長い間、がらんごとと轟音を響かせていました。

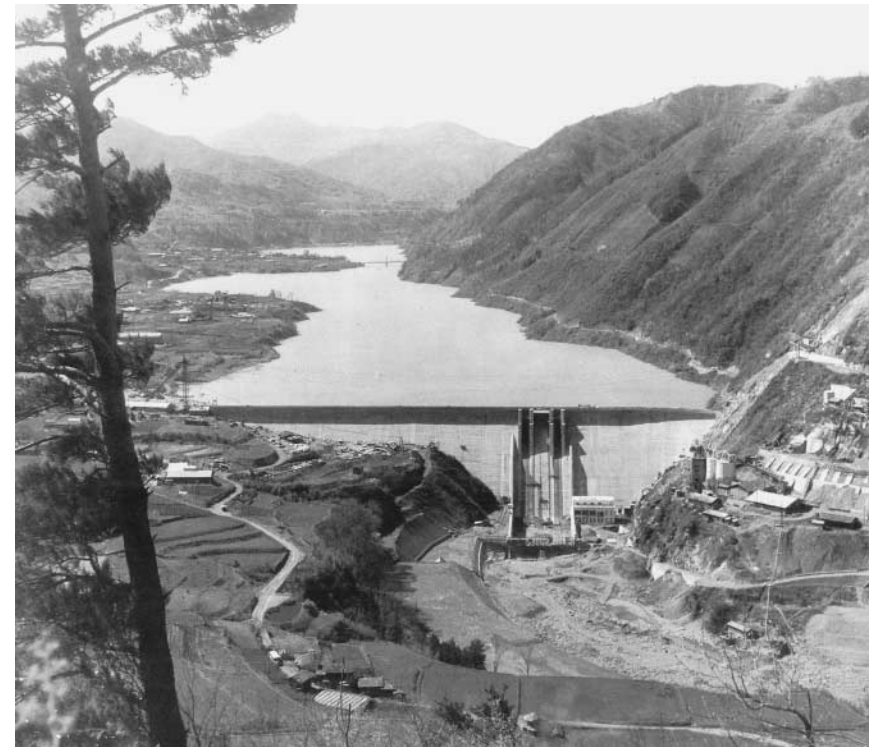
大鹿村の被害は、死者42名、行方不明者14名、重傷者21名、被害戸数は500戸以上、埋没水田30余町歩にのぼりました。天竜峡では線路も流され、伊那谷全体では、死者・行方不明者が130名、被害戸数は約14,000戸にも及んだのです。

三六災害と治水事業

三六災害時、天竜川の支流の中でも最も暴れ川である三峰川に、川を治める美和ダム、高遠ダムが完成していたことは、伊那市域の私たちにとっては大きな救いでした。昭和34年に完成した美和ダムには、現在までに2,000万 m^3 もの土砂が上流から流れ込んでいるそうです。昭和34、36、57、58年、4回の大洪水だけで、合わせて1,100万 m^3 もの大量の土砂が流れ込んだといわれています。美和ダムによって伊那市民の私たちが九死に一生を得たとはいえ、水のひいた後には、目を覆いたくなるような惨状が広がっていました。当時行われていた二毛作の、はぜ掛けしてあった麦の、一斉に発芽した異様さがなぜか目に留まり、災害の忘れられない光景のひとつとなっていますが、それも人的被害が最小限で済んだからこそその記憶だといえましょう。

台風などで中小河川が多く破堤した昭和57年、58年や、水の量は三六災害に匹敵した平成11年の出水も、大変な洪水災害ではありましたが、三六災害以降進められた治水事業により、一部地域を除けば、全体に被害に歯止めがかかったという印象を受けました。小洪、大河原、分杭峠などでは砂防ダムが大いに威力を発揮し、天竜川流域を土砂災害から守ってくれました。備えあれば憂いなしと申します。環境の時代を迎えた今、厳しい自然と人が向き合う姿勢も、対決から共生へと変わってきました。自然豊かな伊那谷と天竜川の安全を願い、これからはいたわりややさしさのある河川整備と治水が求められているように思います。しかし、伊那谷の急峻な地形を一気に流れ下る、天竜川上流域の急勾配な河道、水の勢いが強い上に、もろく崩れやすい谷の地質など、激しい水流に大量の土砂が削られ押し流がされているという現実、今もなんら変わりありません。折しも6月は土砂災害防止月間です。時には三六災害の記憶を呼び起こし、三六災害が、戦中戦後の供出で樹木が乱伐され、土砂や水を抱える力を山が失ったために起こった「人災」という側面も踏まえ、水害特性地で暮らす意識をしっかりと持って、過信や油断なく、注意し

て川とつきあっていくことが大切でしょう。



美和ダム（完成当時：S33.4）

第四章 追 想

観測員研修会のこと

研修会も始めの頃（昭和40～50年代）は中部電力、電源開発公社、雨量観測をする小中学校の職員の方々と合同で、事務所の会議室で行われておりましたが、昭和60年代後半から平成にかけては、民間の観測員のみでの研修会が、温泉のある公共施設や道の駅で、一泊での研修会が毎年行われるようになり、役所のバスで施設の見学やら水文、雨量観測、自記量水標や雨量計の取扱についての説明や研修が行われましたが、何よりの楽しみは調査課や中部建設協会の皆さんとの懇親会で、酒好きの私などは毎年楽しみにして参加させていただきました。忙しい中、課長さん始め大勢の方々と昔の観測の思い出話や観測員交互の交流など夜遅くまで続き、本当に楽しい研修交流会でした。今でも訪れた各地の思い出にひたっております。



建設省の人々と



観測を開始した頃の著者



川で洗濯



殿島橋

豊かなり天竜川

魚釣りをよくしました。冒頭にも書きましたが、増水や出水の時は、決まって魚が捕れるのです。

岸辺に寄って、なんとか急流から逃れようと魚も必死なんですね。それを捕まえてしまうのも忍びないと思いつつ、上流から流れてきた魚や、そこで踏みとどまっている魚を、苦もなく一網打尽にする絶好のチャンスをみすみす逃すのも惜しくて、ついつい夢中になってしまいました。

一番に思い出されるのが昭和34年の夏です。父親を亡くしたその年はちょうど新盆に出水があって、計測にいったら、手でわんさとすくえるほど魚が集まってきたものだから、家には親戚が来たりしているのだけれど、いても立ってもいられず捕まえにいて、家内からは「新盆に殺生をして」と、大目玉をもらいました。

観測からは退いた身ですが、一杯やるほうは、まだまだ現役で、ほちほちと楽しんでおります。酒の肴といえば、伊那谷には「ざご虫」があります。川底にいる水生昆虫の佃煮なのですが、ご存じでしょうか。田舎のゲテモノ食いと恐ろしがる人もいますが、それは食わず嫌いというもので、もったいないですよ。これがなかなか上等な珍味なので、だまされたと思って食べてみてはどうですか。ざご虫を調理するには泥

を吐かせたりする下ごしらえにとても手間がかかる。それでも手間を惜しまないのは、ウマイから。それしか理由はありません。この界限ではどの家庭でも、おかあさんたちが、これをうまく味付けしました。そして男は酒を飲んで口々に、「うちのざざ虫が一番だ」というわけです。手前味噌を承知で申し上げますが、やっぱり、わたしも「うちのが一番」という輩であります。観測も切りがついて、家内にもゆっくりしてもらいたいと思う反面、酒の肴の支度では、まだお役ご免してもらっては困るので、ご苦労だけれど、これからもよろしくと、なんとかお願いしておるところです。そして、台風で川が荒れないようにと祈って、秋が来るのを待ち焦がれています。



天竜川の太公望



ザザムシ採り風景

伊那の三大昆虫珍味



ザザムシ



ハチノコ



イナゴ

叙勲に寄せて

観測も終盤の平成12年。国から思いがけないご褒美をいただけることになりました。勲六等瑞宝章授与。キツネにつままれたような気持ちで、さてどうしたものかと、以前農協で叙勲を受けた方のところに出向き、その作法やら着ていくものやらを相談しました。それまで私は、ひとりで式に出るつもりでおり、それを何気なく話すと、「そういうものではない。夫婦同伴が常識だし、まして、キミの場合は、観測の第一功労者は奥さんだろう。連れて行ってあげなくちゃ駄目だよ。」と叱られ、ああ、そういうものかと、慌てて宿泊の予約を入れて、家内の色留め袖を用意し、連れだって出かけることになりました。泊まったのは、虎ノ門の農協会館だったかと思います。一年365日、盆正月もなく、40数年観測観測の毎日でしたので、この時は、緊張もしましたが、夫婦そろってささやかな旅行気分を一緒に味わうこともできました。



勲六等瑞宝章



叙勲額



慶びの著者夫妻



新聞記事

勲一等から六等まで、叙勲を受ける人は2,600人。夫婦でその倍の5,200余りの人が、天皇陛下に拝謁するため、各省庁に別れて一週間に亘り皇居に参詣するそうです。又文部省、厚生省等叙勲社の多い省庁では各県庁で大臣に替わり県知事さんより伝達されるとのこと。私は建設省の管轄でよかったと、ことさらにありがたく感じ入りました。六等の叙勲には、私と同じような観測員が全国から6人、ほかに僻地で郵便の集配業務に携わっていた人、消防署の署長を長年勤めた人などがおりました。

勲一等は、天皇陛下から直接授与、二等は陛下の御前で総理大臣からの授与、というように位によって叙勲の形式も違っていました。私たちは、伝達式終了後バスで皇居に向かい、陛下の拝謁と記念写真撮影し、東京駅前解散でした。賞状と勲章、そして小さくて上品なカフスポタンを大臣から頂戴いたしました。勲章は正装のモーニングに着けるもので、カフスポタンは普段身につけるために勲章の代わりとしていただけるとのことでしたが、それさえもつけて出かけるようなところもありませんので、眺めたりしまったり、思い出の品として大事にしております。

勲章をいただいたからといって、世間的には珍しいことでもありませんし、ここで取り立てて書くことでもなかろう、と思われる方もいらっしゃるでしょう。叙勲で人生が変わることはありませんし、もちろん偉ぶるつもりもありませんが、ささやかに生きてきて、地道にひとつのことをやり終えた証として、立派な卒業証書をいただいた、あるいは永年勤続表彰をもらった、とそんな気がして、ありがたくこれを受けとめておる次第です。

もちろんそれは、私ひとりの力ではありません。献身的に長年協力してくれた妻と、お世話になった元建設省の方々、森林組合の方々、観測がうまく続けられるよう処遇して下さった勤務先、農協の先輩や同僚の方たち、快く手助けをしてくださったご近所のみなさん、個々にお名前を挙げることは叶いませんが、本当に多くの方からご支援をいただき、職務を全うできましたことは、本当に皆様方のおかげです。心より感謝

申し上げます。

このたび「語り継ぐ天竜川」執筆の機会をいただき、諸先生方の後ろに名を連ねることは、大変おこがましくもあり、恥じ入るばかりですが、こうして感謝の気持ちを述べさせていただくことができただけでも、大きな喜びとなりました。国土交通省天竜川上流河川事務所の担当各位に改めてお礼申し上げます。

特別面白い話もできませんでしたが、ここまでおつきあいくださった希少な読者の方、最後になりましたが、ありがとうございました。



下平長治 (しもだいらちょうじ)

- ・昭和5年(1930)6月 長野県伊那市東春近渡場に生まれる。
- ・昭和30年(1955) 「建設省沢渡水位観測所」開設に伴い、観測員を委嘱。
- ・昭和34年(1959)6月 天竜川洪水予報連絡会長より表彰状を受ける。
- ・昭和36年(1961)7月 伊那谷集中豪雨による「三六災害」を体験。
- ・昭和39年(1964)7月 建設省天竜川上流工事事務所長より表彰状を受ける。
- ・昭和48年(1973)7月 建設省天竜川上流工事事務所長より感謝状を受ける。
- ・昭和54年(1979)7月 建設省中部地方建設局長より感謝状を受ける。
- ・平成9年(1997)7月 建設大臣より感謝状を受ける。
- ・平成12年(2000)4月 勲六等瑞宝章を受章。
- ・平成12年(2000)12月 退任。
- ・平成13年(2001)1月 建設省中部地方建設局長より感謝状を受ける。



天竜川と生きて

企画・発行／

国土交通省中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
〒399-4114 長野県駒ヶ根市上穂南7-10
Tel.0265-81-6415(調査課)

著者／ 下平長治

〒399-4432 長野県伊那市東春近渡場1877-2

編集／ 有限会社ウェーブ

〒396-0021 長野県伊那市水神町1580

印刷／

「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

南アルプス・中央アルプスという日本を代表する山脈の間に形成された伊那谷と、その中央を北から南へ貫流する天竜川。天竜川流域は、美しく豊かな自然環境に恵まれ、古来より人々の交流が盛んで、固有の文化が育まれる等、数々の天竜川がもたらす恩恵に浴してきました。一方、名にし負う「暴れ天竜」は、昭和36年災害(三六災)に代表されるように、豪雨時には日々の穏やかな表情を一変し、猛々しい牙を剥き、人々の暮らしを脅かしてきました。

天竜川上流河川事務所では、天竜川が“母なる川”として優しい微笑をたたえ続けて欲しいと願う人々の切なる気持ちに応えるため、半世紀にわたり、地域の皆さんの多大なご協力のもと、より安全な天竜川、より親しめる天竜川をめざして河川事業や砂防事業といった治水事業に取り組んできました。治水事業の実施にあたっては、流域内の自然環境や伊那谷に暮らす人々が長い歴史の中で築上げてきた文化等を十分に理解し、地域の皆さんとの意見交換を行い、事業に反映していくことが大切だと考えています。

「語りつぐ天竜川」シリーズは、天竜川に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の皆さんに天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立てるために、昭和61年度より発刊してきました。シリーズも50巻を数え、好評をいただいておりますが、これも偏に天竜川を愛する地域の皆さん、その気持ちに答えようとお忙しい中ご協力いただいた執筆者の方々のご尽力の賜物と深く感謝申し上げます。

近年も自然災害の猛威は各所で報告されているとおりでありますが、天竜川流域においても、次なる豪雨に備えたさらなる治水施設の整備に向けた取り組みが求められています。天竜川上流河川事務所では、「安全・安心」「環境」「交流」という3つのテーマをもとに、川づくり、地域づくりにこれからも努めて参ります。皆さんのさらなるご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、ご執筆頂いた方々には、自由な立場からお考えを披露して頂いておりますので、国土交通省の見解とは異なる場合がありますことを付言させていただきます。

国土交通省中部地方整備局 天竜川上流河川事務所

事務所長 三上 幸三

「語りつぐ天竜川」 目録

- | | | | |
|-----------------------------|----------|--|----------------------|
| 1. 伊那谷の気象 | 米山 啓一 著 | 31. 東天竜 | 三浦 孝美 著
仁科 英明 著 |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害 | 北澤 秋司 著 | 32. 天竜河原の開発と石川除 | 塩沢 仁治 著 |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み | 鈴木 德行 著 | 33. 伊那谷は生きている | 松島 伸幸 著 |
| 4. 総合治水の思想 | 上條 宏之 著 | 34. 天竜川の災害伝説 | 笹本 正治 著 |
| 5. 総合治水と森林と | 中野 秀章 著 | 35. 天竜川の災害年表 | 笹本 正治 著 |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷 | 松澤 武 著 | 36. 天竜川水運と樽木 | 村瀬 典章 著 |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷 | 今村 真直 著 | 37. 水辺の環境を守る | 桜井 善雄 著 |
| 8. 村境は不思議だ | 平沢 清人 著 | 38. 諏訪湖 — 氾濫の社会史 — | 北原 優美 著 |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷 | 倉沢 秀夫 著 | 39. 河川工作物と魚類の生活 | 中村 一雄 著 |
| 10. 諏訪湖の御神渡り | 米山 啓一 著 | 40. 天竜川上流域の過疎問題 | 山口 通之 著 |
| 11. 理兵衛堤防 | 下平 元護 著 | 41. 資料が語る 天竜川大久保番所 | 松村 義也 著 |
| 12. 近世 天竜川の治水 — 伊那郡松島村 — | 市川 脩三 著 | 42. 天竜川上流 河辺の植物と植生 | 関岡 裕明 著 |
| 13. 川筋の変遷 — 天竜川と三峰川の場合 — | 唐沢 和雄 著 | 43. 水利開発にみる中世諏訪の信仰と治水 | 藤 森 明 著 |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性 | 宮崎 敏孝 著 | 44. 横川山巡覧記 — 『辰野町資料第87号』より — | 辰野町教育委員会編
赤羽 篤 校訂 |
| 15. 天竜川の橋 | 日下部 新一 著 | 45. 天竜川の鳥たち | 福与 佐智子 著 |
| 16. 伊藤伝兵衛と伝兵衛五井 | 北原 優美 編 | 46. 遠山川流域の民族とふるさとイメージの創造 | 浮葉 正親 著 |
| 17. 天竜川の魚や虫たち | 橋爪 寿門 著 | 47. 田切ものがたり | 赤羽 篤 著 |
| 18. 天竜川のホタル | 勝野 重美 著 | 48. カエルと暮して | 山内 祥子 著 |
| 19. 天竜川流域の村々 | 松澤 武 著 | 49. 伊那の冬の風物詩 ざざ虫 | 牧 田 豊 著 |
| 20. 小渋川水系に生きる — 人と水と土と木と — | 中村 寿人 著 | 50. みんなの三峰川を次世代に | 三峰川みらい会議
事務局 編 |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防 | 森岡 忠一 著 | 51. 三峰川ものがたり | 三峰川みらい会議
北原 優美 著 |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術 | 吉澤 孝和 著 | 52. 天竜川水系の水質
— 「泳げる諏訪湖・水遊びのできる天竜川」を目指して — | 沖野 外輝夫 著 |
| 23. 土木技術と生物工学 — 生きものを扱う技術 — | 亀山 章 著 | 53. 天竜川の帰化植物たち | 木 下 進 著 |
| 24. 戦国時代の天竜川 | 笹本 正治 著 | 54. 中央構造線読み方案内 — 諏訪から大鹿村地藏峠まで — | 河本 和朗 著 |
| 25. 天竜川の水運 | 日下部 新一 著 | 55. ふるさとの山 駒ヶ岳ものがたり | 赤羽 篤 著 |
| 26. 総兵衛川除 | 市村 咸人 著 | 56. 近世信州伊那郡大河原村の自然環境と人間 | 松原 輝男 著 |
| 27. 紙芝居 開墾堤防 — 下伊那郡豊丘村伴野 — | 竹村 浪の人 著 | 57. 地名を通して見る 天竜川と人々の暮らし | 松崎 岩夫 著 |
| 28. 昭和36年伊那谷大水害の気象 | 奥 田 穰 著 | 58. 伊那谷の土砂動態 | 久津見 生哲 著 |
| 29. 天竜川の淵伝説 — 『熊谷家伝記』を中心に — | 笹本 正治 著 | 59. 天竜川と生きて | 下平 長治 著 |
| 30. 天竜川の源流地帯 | 赤羽 篤 著 | | |